

1

「そんで？全く動きがないからって暇こいてるってわけな？」

キースのいやにや笑いを目の前にしながら、ガストは渋い顔でうなずくしかなかった。

場所は、ソルバークスのメインストリートからやや外れた路地裏。開店間もない うたかた亭 にはまだ客も入っておらず、フレンチメイド姿のウイエイトレス、シータ・アンジェラも暇そうに二人の会話に聞き耳を立てている。

「ゲンさんが奪われて2週間ね・・・」

周囲に誰もいないとはいえ、宝物管理室の危険なアイテムをそのまま口にするわけにはいかない。必然的に符丁を利用しなければならない。しかし、ダーク・リフレクション には既に愛称とも言つべき言葉があてがわれていた。ドッベルゲンさん。ゲンさん だけでは何のことだか分からないのいい事に、関係者の間では公然とその言葉が利用されていた。

「ふうん・・・で、動きがないからって何もしないわけ？」

シータが爪を研ぎながら、退屈そうな口調で会話に入ってくる。

「いや、動きがないからこそ、何か情報がないかここに来たんだが・・・」

頼みの綱としていたこの うたかた亭 にも情報がなかった。その事実がガストの言葉を歯切れの悪いものにしてている。

「どっちにしたって他人任せじゃん」

ガストの歯切れの悪い言葉とは正反対に、シータの言葉は歯に衣着せぬ物の言い様だ。

「ああ・・・分かってる」

ダーク・リフレクション が奪われて2週間。トリアが連れ去られてから3週間が経とうとしている。その間、ガストはラダロス白鎧騎士団に紛れ込ませてもらい、様々な情報をかき集めたが、トリアを連れ去った男の消息は全くつかめていない。

「3週間か・・・」

ジョッキになみなみと注がれたエール酒を胃の中に流し込みながら、ガストがつぶやく。

「3週間も音沙汰ないの？その娘」

キースとのじゃれ合いに飽きたのか、シータがガストへ身を乗り出して聞いてくる。

「何の連絡もない」

「聞いた話じゃ、簡単にやられちゃうような人じゃないんだって？」

「そうだな・・・」

シータの質問に答えながら、ガストはトリアの事を考える。そう簡単に殺されるような戦士ではない。それに襲撃を受けたヴェルジェの話では、気絶をさせた上で連れ去ったという。殺すのならば、トリアを連れ去った男は、すぐさまその場で殺せた筈だ。

「だったら何で連絡取ってこないんだろ？」

「様子見やる」

キースが磨いているグラスから目を離さずに言った。

「様子見？」

「もちろん、生きているっていう前提あつてのことやけど」

「連れ去った相手の状態を見てることか？」

「そういうことやね」

ガストは考える。自分が逃げるために相手の状態を見ているのか、それとも、自分達が倒すために相手の状態を見ているのか。いずれにしても、あのトリアにそれほどまでの慎重さを強

いる相手なのだ。トレアとヴェルジエを相手に戦って、圧倒しているとも聞いている。かなりの強敵と見ていいだろう。

「こつちから探り入れればいいのに」

「シートがつまらなさそうに髪をもてあそびながら言う。」

「その糸口が分かつてりやとつくにやつてるさね」

シートにやり込められているのが気に入らないのか、助け船を出そうとしているのか、キースが同意を求めてガストに軽く目配せをする。シートはキースが反抗的なのが気に入らないのか、ムツとした顔をして二人を睨み付けた。

「ほんつと、大の男がやることが見つかからないからってこんな所で腐ってるだなんて・・・」

「思いついたら猪突猛進のイノシ娘に説教なんかされたかねえよ」

キースもシートへの罵詈雑言にしばれを切らしたのか、磨いていたグラスを棚に片付けて指さしながらシートを挑発する。

「言つたわねえ？」

「いや、アンタの言う通りだ。まったくもって不甲斐ない」

ガストは残りのエール酒を軽々と飲み干すと、苛立ちを抑えきれずに大きな音をたててジョッキをカウンターに置いた。

シートは意外そうな表情がすぐに意地の悪い微笑みに変わる。なまじ整った顔立ちをしているだけに悪魔的な表情になっている。

「アンタもこの人くらい実直だったら可愛げあるんだけどねえ？」

クスクスと笑いながらキースを見遣る。キースは慄然とした表情のまま再びグラスを手に取って磨きはじめた。

「安い挑発してんじゃねえよ」

「ホント、つまらない男だよねえ〜」

「誰に同意を求めてんだ」

呆れたようにキースはグラスを磨くことに専念している。

不意に店の扉が開いて、むさ苦しい男達がどやどやと入って来た。

「いらつしゃーい」

シートは表情がすぐに営業用の笑みに切り替わる。カウンターの片隅に置かれていたメニューを手に取り、店の中央付近に陣取った男達の注文を聞きに行った。

「まったく手がかりがないわけでもない」

不意にガストが話を切り出した。

「ほう？」

「トレアと一緒に襲われたヤツの話を元に、似顔絵を描かせたんだが」

「どれどれ？」

ガストがキースに促されて、ズボンから羊皮紙に描かれた人相書きを取り出す。その中身を覗き込んだキースの表情が消えるのをガストは見逃さなかった。

「どうだ？」

キースの態度に不審なものを感じ取ったガストは、直接的に聞き出すことが無駄であることを直感的に感じ取っていた。用心深くキースの様子をつかがいながら、ガストは無難な問いに止めておくことにした。

「いや、知らんな」

ガストが差し出した羊皮紙には、黒髪で目に陰がある男が描かれていた。頬がこけている分、鋭角的に突き出した顎と大きめの鼻が目立つ。しかし、それよりも描かれた男の異相を際立たせているのは、炯と光る意志の強そうな灰褐色の瞳だった。

ある程度は想像できた答えに、ガストの口からは少しばかりの溜息が漏れる。

「すまんな」

「いや、気にしないでくれ」

これから先をどうやって聞きたそうかと考えながら、ガストは当たり前障りのない言葉を選ぶ。

「注文入りませう！」

シータの声に振り返ると、先ほど店に入ってきた男達が異国の言葉で騒いでいるのが見えた。

「黒エール酒、大ジョッキ7杯にてきとーにツマミってさ」

気がつくのと、シータがいつの間にかカウンターに戻って来てキースに注文を引き継いでいる。

「あいよ」

キースが注文を受けて奥の部屋に姿を消した。ツマミでも取りに行ったのだろう。

「あいつらは・・・？」

あまり耳慣れない異国の言葉に、ガストは素直に疑問を口にした。

「ああ、あいつらはね、ジェスタターメントの帝国騎士みたいよ」

「ジェスタターメントか」

ジェスタターメント神聖帝国。大陸西域の中でも最も北方に位置する大国だ。ラムシュタイン王国とも一部の国境が接しており、なかなかキナ臭い噂が絶えない。ジェスタターメントが位置する北方は気候も寒気が厳しく、農業に向いていない痩せた土地が多い。それでも鉱業において良質な鉱石を産出していることから、それを交易品として国外に売り出すことによって農作物を南方の国々から得ていた。

しかし、この近年になって鉱石の産出量が落ち、農作物の輸入が困難になったため、肥沃な土地を得るべくラムシュタイン王国に対しても武力的な示威行為を繰り返している。

ガストは傭兵として各地を巡ってはいたが、傭兵稼業は東方や南方での需要が多く、未だにジェスタターメントの土地を踏んだことはなかった。

「あいつらの装備を見る限り、鉱石の生産量が落ちたとも思えないな」

ガストが見た限りでは、帝国騎士の装備の質がラムシュタインと比較して劣ると思えなかった。むしろ、卓に立てかけている剣の鞘もジェスタターメントでしか採れないコロナ鋼材特有の鈍い光を放っている。鎧の装備から見取れる階級もさほど高くはない下級の騎士にまで軽く頑強なコロナ鋼材がふんだんに使われていることから考えれば、ジェスタターメントの鉱石産出量が落ちたとは思えないのだ。

「あんまり大きな声では話さないでくださいねえ」

シータはにこやかにガストに注意を促す。

「ああ、分かってるさ」

「鉱石は確かに不足気味らしいですよ」

「しかし・・・」

「ただし、生産量は落ちていないらしいけどね」

「軍備に回されているって噂らしい」

キースが奥からガストのエール酒を持ち出してきて二人の会話に割り込んだ。

「・・・なるほど」

ガストはさりげなく背後の男達の装備を再度確認した。

「で、何で下級の帝国騎士がこんな所に？」

「帝国の宰相がやってくるんだそうで」

物騒な事件が起きているのを分かった上でやってくるのだろうか？そんな疑問がガストの脳裏をよぎる。

「こんな時期に？」

「まったく、はた迷惑な話よ」

キースが苦笑しながら7杯の黒エール酒をカウンターに並べてそう言った。